

レントキラーに侵蝕され始めているのかもしれませんが。つまり、広範な地盤沈下がすでに、それこそ気づかぬうちにゆっくりと、そしてまたゆっくりと、起きつつあるのかもしれませんが。

きつい近親交配は、受胎率低下、流産（死産）率上昇、奇形発症率上昇等をもたらすと推考され、39 頁で論じた「収率」「歩留まり」が落ちるという表現がまさしく当てはまるのです。

自己の生産においてそのような現象が発生した場合に、「それは近親交配に起因するものではなかったのだろうか……？」といった視点も持ち合わせている生産者は果たしてどの程度いるのだろうかと思うこともしばしばです。調教師にしても評論家にしても、その眼は競走馬として入厩できた個体ばかりに向きますが、生産者はそうはいかないことを忘れてはなりません。

どんなにきつい近親交配だったとしても、有害遺伝子を継承することなく無事に閤門を突破して健常な身体を授かった個体ならば「競走馬」として登録されうるわけであり、よって、39 頁にも書いたとおり、競馬場に姿を現す馬においては、その弊害を懸念する必要性は薄れているとも言えます。しかし、遺伝病というものは加齢とともに発症するものもあり、それが内面的なものであれば、なおさら気づきようもないのです。

## **2.21 アメリカの危機意識**

2019 年 9 月、アメリカジョッキークラブは各種牡馬の年間種付頭数を 140 に制限することを検討中と発表しました。同年 9 月 6 日の『BLOODHORSE』の記事には「The Jockey Club board of stewards, concerned with narrowing diversity of the Thoroughbred gene pool, announced…」とあり、北米においても特定の種牡馬への著しい人気集中による遺伝的多様性の低下が懸念されていることが記されています。

そして 2020 年 5 月、アメリカジョッキークラブは、2020 年以降に生まれた種牡馬については年間種付頭数を 140 以下に制限するルールを、アメリカ、カナダ、プエルトリコで施行すると正式に発表しました。これは、2019 年以前に生まれた種牡馬に対しては一切の制約がないことから、当初の案から見ればかなり緩和修正された内容でしたが、種付頭数制限は大手ブリーダーの利益に確実に反するため、私はこの案はけんもほろろに廃案にされると予想していたのです。よって、そもそも発効が決定されたこと自体が驚きでしたし、個人的には非常に評価をしました。そしてアメリカには、遺伝学の分野においても問題解決に真摯に取り組む一定数の科学者がいることが想像できたのです。

……が、結果としてこの策は反故にされました。

2021 年の 2 月、ケンタッキーの 3 つの大手ブリーダーは、本施策の無効化を求めて裁判を起こしました。同月 23 日の『BLOODHORSE』の記事によれば、ジョッキークラブの行為は「blatant abuse of power」である旨を主張したのですが、これは日本の独占禁止法における「優越的地位の濫用」のようなものでしょうか。同年 3 月 19 日付の JAIRS（ジャパン・スタッドブック・インターナショナル）のウェブサイト中の記事「名門 3 牧場、種付頭数制限ルールに対して提訴（アメリカ）【生産】」にはこのことが翻訳掲載されていますので、参照いただければと思います。

そして、現地での途中の協議状況は知る由もないのですが、2022 年に入り、一旦は施行が決定した本施策をジョッキークラブは撤回するという決着に至りました。残念ながら私の当初の予想どおりであり、こんな予想は当たってほしくなどなかったのですが。この経緯も、『BLOODHORSE』の同年 2 月 23 日付の記事の翻訳として、3 月 23 日付の JAIRS のウェブサイト中の記事「種付頭数制限ルール撤回も血統の健全性への懸念は残る（アメリカ）【生産】」に掲載されています。

## **2.22 持つべき集団遺伝学の知識**

あらためて「集団遺伝学」とは、その生物集団の遺伝子構成がどのように支配され変遷しているかを研究する遺伝学の一分野であり、それこそ、本章における「2.12 近交度合の解析（そ

の1：内国産馬)」以降は集団遺伝学に関する話なのです。

上述の提訴したケンタッキーの大手ブリーダーは、遺伝的多様性の低下を理由としたジョッキークラブに対して、「科学的証拠がない限りこのような施策はなされるべきではない」と述べている旨が当該記事に書かれていました。しかし、先に書いたとおり、遺伝的多様性低下の現象たる「近交弱勢」の様相が一旦でも明確に認められる事態になったなら、つまりそのような「証拠らしきもの」が実際に認識されるようなレベルにまでなってしまったなら、もはや後戻りはできません。生産界全体が“The End”なのです。

つまり、種付頭数制限のような方策の決定に影響力のある者、そしてその利害に接する者たちが、「遺伝」に関する造詣を深めない限り、行ったり来たり of 論争を今後も繰り返してしまうということです。けれども、そんな論争を延々とやっているのはおかまいなしに、遺伝的多様性の低下は加速度を上げつつあります。

なお、その記事によれば、このような制限案が他の諸国では施行されていないことから、原告は米国の優良種牡馬が他国に流出してしまうという懸念を示したようですが、これについてはそのとおりでうなずくものがあり、北米生産界はそのあたりも考慮しながら真摯に方策の再検討をする必要があるでしょう。

そして、このことから忘れてはならないのは、これは北米だけで解決できる問題ではないということです。つまりこのような施策はグローバルになされねばならないということであり、協調（ハーモナイゼーション）が必要不可欠ということです。

欧州にしても、ご存じのとおり英国のEU離脱問題でも紛糾したように、これを見ても、特に欧州競馬界を牽引する英、愛、仏が一枚岩となって本件に対する何らかの統一方策を迅速に打ち出すなんて想像もできません。20世紀初頭に英国で施行された、祖先の全てがジェネラルスタッドブックに記録されている馬にさかのぼれなければサラブレッドに非（あら）ずとした「ジャージー規則」にしても、これはまさしく英国中心の思考に基づくものでしたし、仮に欧州の一国が今般の米国のような方策案を打ち出したとしても、周囲の国々が追随しなければ何の意味も持ちません。しかし、先に書いた現状からも、欧州も本件の議論に迫られるのは時間の問題でしょう。

この議論の波は日本にもいずれ押し寄せてきます。けれども、少なくとも私レベルでは現時点において、日本国内における本件の真面目な議論の気配がなかなか感じ取れないのです。

## 2.23 講ずべき方策

以上を書いてきたことから、サラブレッドという種の保全のためにはいつまでも無策のままではいられないはずがありません。そのためにも各国の生産界が、いざという時にどのような協調案を打ち出せるかが大きな鍵となります。

仮に種付頭数制限をするのであれば、それぞれの利害がぶつかり合い、対象種牡馬や制限頭数などの詳細事項に関する交渉も一筋縄ではいかないでしょう。すると、5年、10年などあっという間に過ぎてしまうわけです。

そこで、我が国としてはどのような策を打ち出すべきかですが、私が思いつく検討すべき策はとりあえず以下の2つです。

### ①年間種付頭数制限

### ②近交係数（またはこれに類するもの）が高くなる配合例数の上限設定

上記①の理由はアメリカジョッキークラブが考えたことと基本的には同じであり、ここでの詳述は割愛しますが、対象とする種牡馬の範囲や、その上限頭数はどの程度にすべきかなどについてはいろいろな意見があるはずです。

ちなみに私はシャトル種牡馬に関しては、第一段階では国内での種付頭数だけを制限対象としたとしても、第二段階ではシャトル先での種付数も含む総数を制限対象とすべきと考えてい

ます。

モーリスを例にすれば、シャトル先での産駒がG Iを制したことからも血の交流は積極的に行うべきという声が出ているはずですが、もはや遺伝的多様性低下は個々の国レベルの話ではなくなっているわけです。まあ、シャトル先も含めた総数という策を施行したら、シャトルする種牡馬はいなくなってしまうかもしれませんが。

次に上記②は、各国（各地域）の配合総数に対して、近交係数が高くなる配合例数に上限を設けるという案です。なお、これはまず「近交係数」とはどのような数値なのか？ ということに関係各位が理解せねばならないことは言うまでもありません。

ただ、思うに、それ以前に、やはりこのような施策がなぜ必要なのかの議論から始めなくてはならないのかもしれない、そのためには「遺伝の基礎」からの科学的啓発を地道に競馬サークル全体に実施しなければならないのです。

## 2.24 サステナビリティ

強い近親交配がリスクであることは、生産者からファンに至るまで感覚ではわかっているようですが、けれども、身体に悪影響を及ぼす潜性遺伝子が二重になる（ホモになる）ことで、その作用を抑制していた顕性遺伝子に邪魔されなくなるというようなメカニズムを理解している者は、実際にはかなり少ないのが正直なところでしょう。そのような状況下で、まずは関係各位が最低でも以下を理解すべきと考えます。

- (1) 「近交弱勢」とは何か？
- (2) 「近交係数」とは何か？
- (3) 「常染色体潜性遺伝病」とは何か？

昨今、「サステナビリティ」という言葉が一種のトレンド化して、果ては企業の格好の宣伝文句と化し、世の中を大手を振って歩いています。しかし、そのように社会の表層を浮雲のごとく漂い続けるがゆえに、その言葉の本質、さらにはそれを成就させるための手段をきちんと模索している者は、この社会の中でどの程度いるのだろうかとも思ってしまうのです。

サステナビリティを直訳すれば「持続可能性」であり、つまり、われわれみんなの生活が毀損されることなく、子孫にもそれが確実に継承されていくというのが私のこの言葉に対する理解です。言い換えれば、個人や小さな集団の繁栄を望むのではなく、大きな集団や社会（ソサエティ）、ひいては全世界に着眼し、その包括的幸福を願うことだと僭越ながら解釈するのです。

繰り返しますが、焦点を当てる先は「個」ではなく「群」です。Enableを例に、きついインブリーディングで生まれた馬が素晴らしい成績をあげたところで、それは一個体においての話にすぎないにかかわらず、このような成功例1つでサラブレッドという総体において問題ないと帰結するような言説をしばしば見聞します。

その一方で、「2×3でもこのような活躍馬が出るけど、だからと言ってみんながそこに好意的になったら遺伝的多様性低下に拍車がかかるので、そろそろ慎重になった方がいいかもしれないね」といったような声はまず出てこないのが実際です。依然としてそんな空気がサークル内を席卷する場合、サラブレッドという種の健全な維持、つまりサステナビリティに関する適切な議論ができるとは残念ながら思えません。

喫煙は健康を害するとされます。しかしこれは相対的な話であって、万人に当てはまることではありません。ヘビースモーカーでも健康を害することなくピンピンと長生きする人がいることも確かです。Enableのような例を挙げて、このレベルの近親交配はまったく問題ないと主張するような言説は、ヘビースモーカーの健康なおじいちゃんを引っ張り出して、喫煙は健康に問題ないと言っていることと同じです。その裏に健康を害したヘビースモーカーがどれだけいたかということに気づこうとしていないのです。その生物群における遺伝子のバラエティが一旦減ったなら、もう元には戻れません。そのことだけは忘れてはならないのです。